

ミニシアターまる 人形劇「かちかち山」

いつもながら達者な舞台だと思いました。

20年以上も人形劇の一人芝居として 作、演出、美術、演者すべてを一人でこなしてきたわけですが、今回表現の可能性をさらに広げたいと演出を”げきだんはてな うそまこと”さんに依頼したとのことでした。

演出がついたことがまるさんの舞台にどのように影響したのかどうかについては今回見ただけではなかなか分かりにくいものがあり、あれこれと述べることはできません。ただ私は常々人形劇の一人芝居にこそ演出をつけて創ってほしいと思っていましたので、まるさんの試みには大いに賛成し、また期待もしているところです。

まず舞台ですが、装置がきちんと端正に作られており、その上でたぬきが入り出す穴があるのも面白いです。人形、小道具もきれいに作られており操作も無理なくこなされておりました。この舞台の簡素さや人形の形象の素直さが、この凄まじい仇討ちのおはなしを受け入れやすくしている一因になっているのではないかと思います。

ただ冒頭のヴァイオリンですが、短くてもやはり生音はインパクトが強いので、その後の芝居の流れに関係がないようなので、やめた方が良いのでは・・・。

受け入れやすくなっているという見方についてですが、それは決してまるさんがこの作品に込めた思い→一般的な昔ばなしではなく太宰治の”御伽草子”にも重なるような本質をとらえたものにしたい←を弱めたり薄めたりしているわけではありません。が、この舞台を保育園や幼児にも見せるということについてはどうかという意見も出ておりましたので。例えばセリフでばばあ汁とかこわそうな言葉があっても2,3歳児の耳にはそんなに強くは残らないのではないかと、それよりも目でみること - 装置や人形がいかにもおどろおどろしいとか、たぬきがおばあさんを殺してしまう場面があるとか - になると、いたずらに怖がらせる、不必要な恐怖感を与えてしまって人形劇をみようと思う前に泣き出してしまうというような事はやはり避けたいと思うのです。その点でこの「かちかち山」は幼児にも受け入れやすい舞台になっていると思いました。

ということで、幼児たちが見た時の反応や様子などをぜひ聞いてみたいです。

どうもお疲れさまでございました。

人形劇団京芸 田山桂子

ミニシアターまる「かちかち山」

中島香織さま お懐かしゅうございます。

十数年前にもなりましょうか。「ミニシアターまる」さんの、この作品を拝見していました。

そして感想文も書いて、演フェスの実行委員会を通して、お届けしていましたね。

その時、気になっていたのは、たぬきの背負った茅葺の葺に点けられた火が漢字で「火」「火」「火」「火」という文字が付けられていましたが、これが、墨色かグレーだったか。火という漢字文字で表されていました。

つまりこんな「アイデア」でどうですか？「いい、アイデアでしょう」と言っているようで、私はシラケテいたのでした。それが指導を受けておられた うそまことクンのアイデアであったのでしょうか？

だから、「せめて『赤く』してくれたら？」と書いてお届けしていたことを思い出していました。そして、今回、そこを楽しみにして席に着きました。

そしたらどうでしょう。今回は、立派に、よく燃えて見えました。

成功でした。

それだけでなく、さまざまところで、工夫を重ね、とにかく一人で、やり通すのであるからと、神経を研ぎ澄まして、改良に改良を重ねて来られたのであろうと、そのご努力に敬服致しました。

「一人芝居で21年」とか。なるほど。納得ですね。まさにお一人で充分この「かちかち山」を語って戴きました。

兎と狸。このあらがい。「抗争」と言いましょうか。「昔年の恨み辛み」このあらがいを、私たち日本人は、中世のころから、さまざまな狸像・兎像を創っては、心の中のいさかいを組み立て、世相の寄り添い、やっつけ合いをして来たのでした。実際、この「うさぎとたぬき」の対立ほど、よく扱われた「昔話」はありません。とにかく「善」と「悪」のはっきりした対立ですから、誰にでもよく分かるお話なんですよね。だからこそ、またよく利用されることになります。

利口に立ち回るウサギと、愚鈍な狸の立場から読み取る手法もあって、その違いは、作者の立場によります。

最近作では、せな けい子さんの絵本@「となりのたぬき」です。「仲よくしたい。のに、できない！」の暮らしがあります。どうすれば「なかよし」になれるのでしょうか。その苦闘は今も続いています。どうすればいいのでしょうか？

荒木昭夫（京都児童青少年演劇協会）